

ぼくの母が、父に朝ごはんを作らなくなって久しい。

もちろん、昔からそうだったわけではないし、今だって全く作らないわけではない。でも、出勤前に食卓で一人、冷めた味噌汁を啜る父の背中を見るたびに、どうしてこうなってしまったのかを考えずにはいられなかった。

ぼくが中学にあがる前まで、父とは母はとも仲がよかった。互いに名前呼び合っていたし、父が朝家を出る前には、玄関で母に「行ってきます」のキスをするのが日課だった。大きく膨れたゴミ袋を持った父の、スーツの肩についた埃を優しく払ってやる母の手は、しかし今、ぼくの胸を締め付ける思い出でしかない。

姉にいわせれば、母は「万年少女にして、仕事に生きる自由人」なのだそうだ。ぼくの姉は、「だって」と「でも」を口癖としている人間を、絶対に大人として認めない。大学に在学中、若くして姉を産んだ母はいま、自宅でささやかなパン教室をしている。父に見せる疲れた顔とはかけ離れた笑顔で仕事をしている母を見ると、その通りかもしれないな、と、腕を組まずにはいられない。

あたしの愛する弟が、また難しい顔をしてなにか考え込んでいる。彼には物事を深く考えすぎるクセがあるのだ。以前、家族4人で函館に泊まったときもそうだった。旅館の部屋で各自くつろいでいるというのに、弟はひとり、そわそわと落ち着かない。

「ねえ、頼むからぼくのリュックに触らないでね。ほら、中身のバランスとか、いろいろあるからさ。あ、あと、そこに畳んであるの、ぼくの明日の服ね。そう、その靴下が一番上に乗ってるやつ。間違えないでよ。」

だが、でっかい恐竜がプリントされた靴下を間違えて履くというのだろうか。

ただの心配性ならほっておくのだが、彼はその上、人に気を使いすぎる節がある。弟曰く、「気は使うためにある」ものらしい。

そんな彼が今夜は一体、何に心を砕いているのだろうか。

最近、異常に早く目が覚める。夫の朝食を用意しなければ……という気だるい緊張感が、常に頭にあるせいかもしれない。

早朝の家の中はしんとして、まるで家族など居ないかのように無表情だ。娘も息子も、まだ夢の中だろう。音をたてないように、細心の注意を払ってコーヒーを淹れた。

私にいわせれば、夫は超人なのだ。彼はなんでも出来る。付き合い始めたばかりの、医学生頃からそうだった。大学の勉強は勿論のこと、食事がきちんと出る下宿だというのに、暇があれば自家製のソーセージを作ってしまうような人だった。これまでの結婚生活二十一年間で、私が作る料理に夫が心から「おいしい」といつてくれたことがあったのかどうか、全く自信がない。そんな夫に、今日も朝食を用意しなければならぬ。あと四十分もすれば、二階の寝室のドアが開くだろう。コーヒーを一口飲んで、ゆっくりと目を閉

じ、こめかみを揉んだ。

子どもたちが小さい頃は良かったと、明け方のベッドの中でぼんやり考えていた。こんなことは珍しい。毎日仕事の疲れのせいで、目覚まし時計に叩き起こされるまでは絶対に目覚めないというのに。

わたしのベッドサイドには、四年前に一家で地中海を旅したときの写真が飾ってある。息子の小学校卒業と、娘の大学合格を祝っての記念旅行だった。海岸に並んだ家族は、揃ってその地の太陽のように眩しい笑顔をこちらに向けている。夢のように楽しい旅行だった。海の色ときたら、ガガーリンが見た地球の色はこんな色だったろうか…と思うほどに美しく、家族は幸福な沈黙に包まれたものだ。もう随分長いこと、家族旅行などしていない。

時計を見て、もう少しベッドの中でまどろむことにした。ここは家の中で唯一、自然に笑っている妻の顔を見ることが出来る場所なのだから。

あれこれ考えた結果、ぼくはいいことを思いついてしまった。早速、先ほどから横で雑誌を読んでいた姉に提案してみる。

「ちよつといいかな。」

「どうした、悩める弟よ。」

「うん、考えたんだけどさ、明日の朝、四人で一緒に朝ごはん食べてみない？」

姉はちよつと驚いたような顔をしたが、すぐに「いいよ。」と頷いた。

「題して、幸せ朝ごはん計画！」

「あのさー。キミには反抗期ってものがないの？もしかして、ひそかに終えてたりする？」苦笑しながら姉はいったが、そのあとすぐに、

「あたしたちつてさ、なんていい子ども達なんだろうね。」

と幸せそうに目を細め、ぼくの顔を見た。

「肝心のメニューなんだけど、どうしたらいいかなあ」

幸いなことに、ぼくの姉は料理が上手い。ひとり暮らし四年目ということもあるが、それだけではないと思う。食に対する思い入れが違うのだ。それは、うちの祖母ゆずりのものかもしれない。

「なんか食べたいものある？」

「うーん…やつぱり目玉焼きは外せないよね。おばあちゃんを作るみたいなさ、黄身がうすいピンク色で、ふるふるのやつ。」

「わかった。やってみましょう。あとは炊きたてのご飯とおいしいお味噌汁があれば、基本は完璧だね。」

「あつ、パパさ、鮭の焼魚好きだよね？あと、さもだしの味噌汁だったら喜ぶだろうなあ。」
「鮭はいつもママが冷凍してるのがあるね。でもさもだしなんて、今の時期ないんじゃない？」

いかなあ。冷凍庫にナメコならあったけど。」

「じゃあそれで！」

「あとほうれん草のおひたしかな。」

こんな会話をしているだけで、ぼくはすっかり幸せな気分になっていた。明日の朝はいつより四十分早く起きることを約束して、ぼくは部屋に引き上げた。

そうと決まれば、全力を尽くしていい朝ごはんを作ってやろう。あの弟のことだ、きっとあたしが帰省してくる随分前から、心を痛めていたに違いない。

早速キッチンにいつて、炊飯ジャーを確かめる。案の定、中身は空っぽだった。おそろく、明日の朝はパンのつもりなのだろう。それも悪くないけど……とひとり呟きながら、釜にあきたこまちを三合入れる。米を研ぐときは、一番初めの水が肝心だ。強めの水流でさつと洗い、すぐに濁った水を捨てる。あとは米をつぶさないように、適度に力を込めて研ぐだけだ。

予約時間をちやうど父が起きてくるあたりに設定して、あたしも自分の部屋へもどった。

はつとした。誰かが二階から降りてくる。夫にしては早すぎる時間だ。じつと息をひそめて階段の方を窺っていると、居間のドアがそうつと開けられた。

「ママ！もう起きてたの？」

驚いた顔で入ってきたのは、なんと子ども達だった。

「びっくりした。どうしたの、夏休みに二人揃って早起きなんて。」

「ちよつとね。今日の朝ごはんはあたしたちが作ろうかと思って。」

本当に驚いた。地震があっても起きないような子達なのに。一体どういう風の吹き回しだろう。

「ママはゆつくりコーヒーでも飲んでてよ。ね？」

はにかみながらそういった息子が、急に大人びて見えた。

「あつ、でも、おいしいご飯作るから、やっぱりあんまり飲んじゃダメ！」

思わず吹き出してしまう。やっぱりまだまだ子どもだ。

「よし、始めよう。まずは冷蔵庫から、大根とネギとほうれん草出して。」

「よしきた。」

「じゃあ、このピーラーで大根の皮むいてくれる？」

「おろすの、十センチくらいでいい？」

「うーん、二十センチかな。今朝は四人もいるんだから。」

自分の子どもながら、なんていい子ども達なのだろうと思う。いつの間に二人とも、こんなにしっかりした人間になってしまったのだろう。ついこの間まで、おぼつかない足取りで歩いていたのに。

「ねえ、ママ、ここで作るとこ見てもいい？」

「えー、仕方ないなあ。特別だよ！」

息子がにこにこしながらいう。私はいままで息子の特別でいられるのだろう、と思っ
てすぐに、今朝は余計なことを考えまいと決めた。

二度目の目覚ましが鳴って、重い瞼を開けた。浅い眠りはかえって頭を重くしてしまう
ことを思い出し、少し憂鬱な気分になった。のろのろとベッドから抜け出し、寝室のドア
を開ける。その瞬間、体が止まってしまった。朝食の香りだ。湯気の心地よい香りに、憂
鬱が消えていく。

かすかに階下の会話が聞こえる。わたし以外全員起きているというのだろうか？信じら
れないような気持ちで階段を降りた。

「あつ、パパおはよう！」

「おはようパパ。今日の朝ごはんはちよつとすごいよ。」

「おはよう。」

わたしはただ小さな声で「おはよう」と言うことしかできなかった。その声が意外にも
不機嫌に響いてしまったことに、たちまち後悔する。

「あとはたまご焼くだけだから、テーブルに座ってて。」

赤いエプロンをした娘がそういい、息子は澄まして椅子を引いた。

黙って席に着き、新聞を読むふりをして台所に耳をすませる。

「塩辛とシラスも出せばいい？」

「うん。あとは…お箸ならべてくれるかな。」

ジュワッ、という良い音で、よく熱したフライパンに卵が落とされたのがわかった。
すばやく蓋をして、今度は味噌汁をよそっているらしい。

「お味噌汁運んでー。あつつかから気をつけてね。」

次々と食卓がにぎやかになっていく。胸が熱くなった。

「すげー、おばあちゃんの目玉焼きだ！」

「お皿に移すまでが目玉焼き作りだからね。…よいしょっ」

目のまえに置かれた目玉焼きは、綺麗な薄桃色の黄身をしていた。

「ほら、ママもはやく座って。いただきます、しよう。」

視界が曇っているのは、味噌汁の湯気のせいばかりではないのかもしれない。

家族全員が食卓にそろい、両手を合わせた。

「いただきます！」

四人がほぼ同じタイミングで味噌汁に箸をつけたので、誰からともなく笑ってしまった。
それはとても、幸福な光景だったに違いない。ぼくは心の中で、姉に「ありがとう」をい
った。

ぼくたち家族は、いろんな事にぶつかってあちこちデコボコになってしまったけれど、もしかしてこのまま転がっていけば、また元の丸いかたちに戻ることもできるのかもしれない。ぼくは、そう信じたい。

だってぼくらは愛すべき、たったひとつの家族だから。